

犬と笛

芥川龍之介

青空文庫

いく子さんに献ず

一

昔、大和の国葛城山の麓に、髪長彦という若い木樵が住んでいました。これは顔たちが女のようにやさしくって、その上髪までも女のように長かったものですから、こういう名前をつけられていたのです。

髪長彦は、大そう笛が上手でしたから、山へ木を伐りに行く時でも、仕事の合間合間には、腰にさしている笛を出して、独りでその音を楽しんでいました。するとまた不思議なことには、どんな鳥獣や草木でも、笛の面白さはわかるのでしよう。髪長彦がそれを吹き出すと、草はなびき、木はそよぎ、鳥や獣はまわりへ来て、じつとしまいまで聞いていました。

ところがある日のこと、髪長彦はいつもの通り、とある大木の根がたに腰を卸しながら、余念もなく笛を吹いていますと、たちまち自分の目の前へ、青い勾玉を沢山ぶらさげた、

足の一本しかない大男が現れて、

「お前は仲々笛がうまいな。己おれはずつと昔から山奥の洞穴ほらあなで、神代かみよの夢ばかり見ていたが、お前が木を伐きりに来始めてからは、その笛の音に誘われて、毎日面白い思をしていた。そこで今日はそのお礼に、ここまでわざわざ来たのだから、何でも好きなものを望いむがいい。」と言いました。

そこで木樵きせりは、しばらく考えていましたが、

「私は犬が好きですから、どうか犬を一匹下さい。」と答えました。

すると、大男は笑いながら、

「高が犬を一匹くれなどとは、お前も余つ程欲のない男だ。しかしその欲のないのも感心だから、ほかにはまたとないような不思議な犬をくれてやろう。こう言う己おれは、葛城山かつらぎやまの足あしひと一つの神だ。」と言って、一声高く口笛を鳴らしますと、森の奥から一匹の白犬が、落葉を蹴立かてて来ました。

足一つの神はその犬を指して、

「これは名を嗅げと言つて、どんな遠い所の事でも嗅かぎ出して来る利口な犬だ。では、一生おれ己の代りに、大事に飼つてやつてくれ。」と言うかと思うと、その姿は霧のように消え

て、見えなくなつてしまいました。

髪長彦は大喜びで、この白犬と一しよに里へ歸つて来ましたが、あくる日また、山へ行つて、何気なくなにげ笛を鳴らしていると、今度は黒い勾まがたま玉を首へかけた、手の一本しかない大男が、どこからか形を現して、

「きのう己の兄きの足一つの神が、お前に犬をやつたそうだから、己も今日は礼をしようと思つてやつて来た。何か欲しいものがあるのなら、遠慮なく言うが好い。己は葛城山のてひと手一つの神だ。」と言いました。

そうして髪長彦が、また「嗅かげにも負けられないような犬が欲しい。」と答えますと、大男はすぐに口笛を吹いて、一匹の黒犬を呼び出しながら、

「この犬の名は飛べと言つて、誰でも背中へ乗つてさえすれば百里でも千里でも、空を飛んで行くことが出来る。明日はあしたまた己の弟が、何かお前に礼をするだろう。」と言つて、前のようにどこかへ消え失せてしまいました。

するとあくる日は、まだ、笛を吹くか吹かないのに、赤い勾まがたま玉を飾りにした、目の一つしかない大男が、風のように空から舞い下つて、

「己はおれ葛城山かつらぎやまの目一つめひとの神だ、兄きたちがお前に礼をしたそうだから、己も嗅かげや飛べ

に劣らないような、立派な犬をくれてやろう。」と言ったと思うと、もう口笛の音が森中にひびき渡って、一匹の斑ぶちいぬ犬が牙きはをむき出しながら、駈けて来ました。

「これは噛めという犬だ。この犬を相手にしたが最後、どんな恐い鬼神おにがみでも、きつと一噛ひとかみに噛み殺されてしまう。ただ、己おれたちのやった犬は、どんな遠いところにいるても、お前が笛を吹きさえすれば、きつとそこへ帰って来るが、笛がなければ来ないから、それを忘れずにいるが好い。」

そう言いながら目一つの神は、また森の木の葉をふるわせて、風のように舞い上つてしまいました。

二

それから四五日たったある日のことです。髪長彦は三匹の犬をつれて、葛城山かつらぎやまの麓にある、路みつまたが三みつまた又またになつた往来へ、笛を吹きながら来かかりますと、右と左と両方の路から、弓矢に身をかためた、二人の年若な侍が、遅たくましい馬またがに跨またがって、しずしずこつちへやつて来ました。

髪長彦はそれを見ると、吹いていた笛を腰へさして、叮嚀におじぎをしながら、
 「もし、もし、殿様、あなた方は一体、どちらへいらっしやるのでございます。」と尋ね
 ました。

すると二人の侍が、交る交る答えますには、

「今度飛鳥の大臣様の御姫様が御二方、どうやら鬼神のたぐいにもさらわれたと見
 えて、一晩の中に御行方が知れなくなつた。」

「大臣様は大そうな御心配で、誰でも御姫様を探し出して来たものには、厚い御褒美を下
 さると云う仰せだから、それで我々二人も、御行方を尋ねて歩いているのだ。」

こう云つて二人の侍は、女のような木樵と三匹の犬とをさも莫迦にしたように見下しな
 がら、途を急いで行つてしまいました。

髪長彦は好い事を聞いたと思ひましたから、早速白犬の頭を撫でて、

「嗅げ。嗅げ。御姫様たちの御行方を嗅ぎ出せ。」と云いました。

すると白犬は、折から吹いて来た風に向つて、しきりに鼻をひこつかせていましたが、
 たちまち身ぶるいをつつするが早いか、

「わん、わん、御姉様の御姫様は、生駒山の洞穴に住んでいる食蟹人の虜にな

つています。」と答えました。食蜃人しよくしんじんと云うのは、昔八岐の大蛇やまたのおろちを飼っていた、途方もない悪者なのです。

そこで木樵きこりはすぐ白犬と斑犬ふちいぬとを、両方の側わきにかかえたまま、黒犬の背中に跨またって、大きな声でこう云いつけました。

「飛べ。飛べ。生駒山いこまやまの洞穴ほらあなに住んでいる食蜃人の所へ飛んで行け。」

その言ことばが終らない中うちです。恐しいつむじ風が、髪長彦の足の下から吹き起つたと思えますと、まるで一ひらの木の葉このように、見る見る黒犬は空へ舞い上あって、青雲あおくもの向うにかくれている、遠い生駒山の峰の方へ、真一文字に飛び始めました。

三

やがて髪長彦かみなながひこが生駒山いこまやまへ来て見ますと、成程山の中程に大きな洞穴ほらあなが一つあって、その中に金の櫛くしをさした、綺麗な御姫様おひめさまが一人、しくしく泣いていらつしやいました。「御姫様、御姫様、私が御迎えにまいりましたから、もう御心配には及びません。さあ、早く、御父様おとうさまの所へ御帰りになる御仕度をなすって下さいまし。」

こう髪長彦が云いますと、三匹の犬も御姫様の裾や袖を啣くわえながら、

「さあ早く、御仕度をなすつて下さいまし。わん、わん、わん、」と吠えました。

しかし御姫様は、まだ御眼に涙をためながら、洞穴の奥の方をそつと指さして御見せになつて、

「それでもあすこには、私わたしをさらつて来た食蜃人が、さつきから御酒に酔つて寝ています。あれが目をさましたら、すぐに追いかけて来るでしょう。そうすると、あなたも私も、命をとられてしまうのちがいありません。」と仰おっしゃ有いました。

髪長彦はにっこりほほ笑んで、

「高の知れた食蜃人などを、何でこの私わたくしが怖こわがりましょう。その証拠には、今ここで、訳わけなく私が退治して御覧に入れます。」と云いながら、斑ふちいぬ犬の背中を一つたいたいて、

「噛め。噛め。この洞穴の奥にいる食蜃人を一噛みに噛み殺せ。」と、勇ましい声で云いつけました。

すると斑犬はすぐ牙きばをむき出して、雷かみなりのように唸うなりながら、まっしぐらに洞穴の中へとびこみましたが、たちまちの中にまた血だらけな食蜃人の首を啣くわえたまま、尾をふつて外へ出て来ました。

ところが不思議な事には、それと同時に、雲で埋ま^{うず}っている谷底から、一陣の風がまき起りますと、その風の中に何かいて、

「髪長彦さん。難^{ありがと}有う。この御恩は忘れません。私は食屋人にいじめられていた、生駒山の駒^{こまひめ}姫です。」と、やさしい声で云いました。

しかし御姫様は、命拾いをなすつた嬉しさに、この声も聞えないような御容^{ごようす}子でしたが、やがて髪長彦の方を向いて、心配そうに仰^{おつしや}有いますには、

「私はあなたのおかげで命拾いをしましたが、妹は今時分どこでどんな目に逢^あつて居りましょう。」

髪長彦はこれを聞くと、また白犬の頭を撫^なでながら、

「嗅げ。嗅げ。御姫様の御行方を嗅ぎ出せ。」と云いました。と、すぐに白犬は、

「わん、わん、御^{おいもこ}妹様の御姫様は笠置山^{かさぎやま}の洞穴^{ほらあな}に棲^すんでいる土蜘蛛^{つちぐも}の虜^{とりこ}になっています。」「と、主人の顔を見上げながら、鼻をびくつかせて答えました。この土蜘蛛と云うのは、昔神武^{じんむてんのう}天皇様が御征伐になつた事のある、一寸法師^{いっすんぼうし}の悪者なのです。

そこで髪長彦は、前のように二匹の犬を小脇^{こわき}にかかえて御姫様と一しよに黒犬の背中へ跨りながら、

「飛べ。飛べ。笠置山の洞穴に住んでいる土蜘蛛の所へ飛んで行け。」と云いますと、黒犬はたちまち空へ飛び上つて、これも青雲のたなびく中に聳えている笠置山へ矢よりも早く駆け始めました。

四

さて笠置山へ着きますと、ここにいる土蜘蛛はいたつて悪知恵のあるやつでしたから、髪長彦の姿を見るが早いか、わざとにここにご笑いながら、洞穴の前まで迎えに出て、「これは、これは、髪長彦さん。遠方御苦労でございました。まあ、こつちへおはいりなさい。碌なものはありませんが、せめて鹿の生胆か熊の孕子でも御馳走しましょう。」と云いました。

しかし髪長彦は首をふつて、

「いや、いや、己はお前がさらつて来た御姫様をとり返しにやって来たのだ。早く御姫様を返せばよし、さもなければあの食蟹人同様、殺してしまうからそう思え。」と、恐しい勢いで叱りつけました。

すると土蜘蛛は、一ちぢみにちぢみ上つて、

「ああ、御返し申しますとも、何であなたの仰おっしゃ有る事に、いやだなどと申しましょう。御姫様はこの奥にちやんと、独りでいらつしやいます。どうか御遠慮なく中へはいつて、御つれになつて下さいまし。」と、声をふるわせながら云いました。

そこで髪長彦は、御姉様の御姫様と三匹の犬とをつれて、洞穴の中へはいりますと、成程ここにも銀の櫛くしをさした、可愛らしい御姫様が、悲しそうにしくしく泣いています。

それが人の来た容子ようすに驚いて、急いでこちらを御覧になりましたが、御姉様おねえさまの御顔を一目見たと思うと、

「御姉様。」

「妹。」と、二人の御姫様は一度に両方から駈けよつて、暫くは互に抱だき合つたまま、うれし涙にくれていらつしやいました。髪長彦もこの気色けしきを見て、貰い泣きをしていましたが、急に三匹の犬が背中さかだの毛を逆立てて、

「わん。わん。土蜘蛛つちぐもの畜生め。」

「憎いやつだ。わん。わん。」

「わん。わん。わん。覚えていろ。わん。わん。わん。」と、気の違つたように吠え出し

ましたから、ふと気がついてふり返えると、あの狡猾な土蜘蛛は、いつどうしたのか、大きな岩で、一分の隙もないように、外から洞穴の入口をびったりふさいでしまいました。おまけにその岩の向うでは、

「ぎまを見る、髪長彦め。こうして置けば、貴様たちは、一月とたたない中に、ひぼしになつて死んでしまうぞ。何と己様の計略は、恐れ入つたものだろう。」と、手を拍いて土蜘蛛の笑う声がしています。

これにはさすがの髪長彦も、さては一ぱい食わされたかと、一時は口惜しがりましたが、幸い思い出したのは、腰にさしていた笛の事です。この笛を吹きさえすれば、鳥獣は云うまでもなく、草木もうつとり聞き惚れるのですから、あの狡猾な土蜘蛛も、心を動かさないとは限りません。そこで髪長彦は勇気をとり直して、吠えたける犬をなだめながら、一心不乱に笛を吹き出しました。

するとその音色の面白さには、悪者の土蜘蛛も、追々我を忘れたのでしよう。始は洞穴の入口に耳をつけて、じつと聞き澄ましていましたが、とうとうしまいには夢中になつて、一寸二寸と大岩を、少しずつ側へ開きはじめました。

それが人一人通れるくらい、大きな口をあいた時です。髪長彦は急に笛をやめて、

「噛め。噛め。洞穴の入口に立っている土蜘蛛を噛み殺せ。」と、斑犬ふちいぬの背中をたたいて、云いつけました。

この声に胆をつぶして、一目散に土蜘蛛は、逃げ出そうとしましたが、もうその時は間に合いません。「噛め」はまるで電いなずまのように、洞穴の外へ飛び出して、何の苦もなく土蜘蛛を噛み殺してしまいました。

所がまた不思議な事には、それと同時に谷底から、一陣の風が吹き起って、

「髪長彦さん。難有ありがとう。この御恩は忘れません。私は土蜘蛛にいじめられていた、笠置山かさひめの笠姫かさひめです。」とやさしい声が聞えました。

五

それから髪長彦かみなながひこは、二人の御姫様と三匹の犬とをひきつれて、黒犬の背に跨がりながら、笠置山かさぎやまの頂から、飛鳥あすかの大臣おおみさま様の御出になる都の方へまっすぐに、空を飛んでまいました。その途中で二人の御姫様は、どう御思いになったのか、御自分たちの金の櫛と銀の櫛とをぬきとって、それを髪長彦の長い髪へそっとさして御置きになりました。が、

こつちは元よりそんな事には、気がつく筈がありません。ただ、一生懸命に黒犬を急がせながら、美しい大和の国原やまとくにのはらを足の下に見下して、ずんずん空を飛んで行きました。

その中に髪長彦は、あの始めに通るかかった、三つ又またの路の空まで、犬を進めて来ましたが、見るとそこにはさっきの二人の侍が、どこからの帰りと見えて、また馬を並べながら、都の方へ急いでいます。これを見ると、髪長彦は、ふと自分の大手柄を、この二人の侍たちにも聞かせたいと云う心もちが起つて来たものですから、

「下りろ。下りろ。あの三つ又またになつてゐる路の上へ下りて行け。」と、こう黒犬に云いつけました。

こつちは二人の侍です。折角方々探しまわつたのに、御姫様たちの御行方がどうしても知れないので、しおしお馬を進めていると、いきなりその御姫様たちが、女のような木樵きこりと一しよに、逞たくましい黒犬に跨つて、空から舞い下つて来たのですから、その驚きと云つたらありません。

髪長彦は犬の背中を下りると、叮嚀ていれいにまたおじぎをして、

「殿様わたくし、私はあなた方に御別れ申してから、すぐに生駒山いこまやまと笠置山かさぎやまとへ飛んで行つて、この通り御二方の御姫様を御助け申してまいりました。」と云いました。

しかし二人の侍は、こんな卑しい木樵きせりなどに、まんまと鼻をあかさされたのですから、羨うらやましいのと、妬ねたましいのとで、腹が立つて仕方がありません。そこで上辺うわべはさも嬉しうに、いろいろ髪長彦の手柄を褒め立てながら、とうとう三匹の犬の由来や、腰にさした笛の不思議などをすっかり聞き出してしまいました。そうして髪長彦の油断をしている中に、まず大事な笛をそつと腰からぬいてしまうと、二人はいきなり黒犬の背中へとび乗って、二人の御姫様と二匹の犬とを、しっかりと両脇に抱えながら、

「飛べ。飛べ。飛鳥あすかの大臣おおみさま様のいらつしやる、都の方へ飛んで行け。」と、声を揃えて喚わめきました。

髪長彦は驚いて、すぐに二人へとびかかりましたが、もうその時には大風が吹き起つて、侍たちを乗せた黒犬は、きりりと尾を捲まいたまま、遙な青空の上の方へ舞い上つて行つてしまいました。

あとにはただ、侍たちの乗りすてた二匹の馬が残っているばかりですから、髪長彦は三つ又になつた往来のまん中につつぶして、しばらくはただ悲しそうにおいおい泣いておりました。

すると生駒山いこまやまの峰の方から、きつと風が吹いて来たと思ひますと、その風の中に声が

して、

「髪長彦さん。髪長彦さん。私は生駒山の駒姫です。」と、やさしい囁きが聞えました。それと同時にまた笠置山の方からも、さつと風が渡るや否や、やはりその風の中にも声があつて、

「髪長彦さん。髪長彦さん。私は笠置山の笠姫です。」と、これもやさしく囁きました。そうしてその声が一つになつて、

「これからすぐに私たちは、あの侍たちの後を追つて、笛をとり返して上げますから、少しも御心配なさいませぬ。」と云うか云わない中に、風はびゅうびゅう唸りながら、さつき黒犬の飛んで行つた方へ、狂つて行つてしまいました。

が、少したつとその風は、またこの三つ又になつた路の上へ、前のようにやさしく囁きながら、高い空から下して来ました。

「あの二人の侍たちは、もう御二方の御姫様と一しよに、飛鳥の大匠様の前へ出て、いろいろ御褒美を頂いています。さあ、さあ、早くこの笛を吹いて、三匹の犬をここへ御呼びなさい。その間に私たちは、あなたが御出世の旅立を、恥しくないようにして上げましょう。」

こう云う声でしたかと思うと、あの大事な笛を始め、金の鎧だの、銀の兜だの、孔雀の羽の矢だの、香木の弓だの、立派な大将の装いが、まるで雨か霰のように、眩しく日に輝きながら、ばらばら眼の前へ降って来ました。

六

それからしばらくたって、香木の弓に孔雀の羽の矢を背負った、神様のような髪長彦が、黒犬の背中に跨りながら、白と斑と二匹の犬を小脇にかかえて、飛鳥の大臣様の御館へ、空から舞い下って来た時には、あの二人の年若な侍たちが、どんなに慌て騒ぎましたろう。

いや、大臣様でさえ、あまりの不思議に御驚きになって、暫くはまるで夢のように、髪長彦の凜々しい姿を、ぼんやり眺めていらつしやいました。

が、髪長彦はまず兜をぬいで、叮嚀に大臣様に御じぎをしながら、

「私はこの国の葛城山の麓に住んでいる、髪長彦と申すものでございますが、御二方の御姫様を御助け申したのは私で、そこにおります御侍たちは、食蜃人や土蜘蛛を退治

するのに、指一本でも御動かしになりは致しません。」と申し上げました。

これを聞いた侍たちは、何しろ今までは髪長彦の話した事を、さも自分たちの手柄らしく吹聴していたのですから、二人とも急に顔色を変えて、相手の言を遮りながら、

「これはまた思いもよらない嘘をつくやつでございます。食蜃人の首を斬ったのも私たちなら、土蜘蛛つちぐもの計略を見やぶったのも、私たちに相違ことばございません。」と、誠しやかに申し上げます。

そこでまん中に立った大臣おおみさま様は、どちらの云う事がほんとうとも、見きわめが御つきにならないので、侍たちと髪長彦を御見比べなさりながら、

「これはお前たちに聞いて見るよりほかはない。一体お前たちを助けたのは、どっちの男だったと思う。」と、御姫様たちの方を向いて、仰おつしや有いました。

すると二人の御姫様は、一度に御父様の胸に御すがりになりながら、

「私わたしたちを助けたのは、髪長彦でございます。その証拠には、あの男のふさふさした長い髪に、私たちの櫛をさして置きましたから、どうかそれを御覧下さいまし。」と、恥しそうに御云いになりました。見ると成程、髪長彦の頭には、金の櫛と銀の櫛とが、美しくきらきら光っています。

もうこうなつては侍たちも、ほかに仕方はございませんから、とうとう大臣様の前にひれ伏して、

「実は私たちが悪だくみで、あの髪長彦の助けた御姫様を、私たちの手柄のように、ここでは申し上げたのでございます。この通り白状致しました上は、どうか命ばかりは御助け下さいまし。」と、がたがたふるえながら申し上げました。

それから先の事は、別に御話しするまでもありません。髪長彦は沢山御褒美を頂いた上に、飛鳥の大臣様の御婿様になりましたし、二人の若い侍たちは、三匹の犬に追いまわされて、ほうほう御館の外へ逃げ出してしまいました。ただ、どちらの御姫様が、髪長彦の御嫁さんになりましたか、それだけは何分昔の事で、今でははつきりとわかっておりません。

(大正七年十二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第11刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1998年12月7日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

犬と笛

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>